

一八八四年十月四日(土)

タクール、聖ラーマクリシュナ、カルトラのナビン・セン氏邸にてブラフマ協会員  
たちと楽しくキールタンを歌う

今日は土曜日、コジャガル・プールニマー。タクールはカルトラにあるケーシャブ・センの兄、故  
ナビン・セン氏の家に来ておられる。キリスト暦一八八四年十月四日。ベンガル暦二二九一年アツシ  
ン月十九日。(訳註、コジャガル・プールニマー——アツシン月の満月の日にラクシュミー女神に祈りを捧げると、女神  
が祈りの場に現れ、願いを叶えてくれるとされる日)

前週の木曜日に、ケーシャブのご母堂ぼどう様がタクールを訪問して、ぜひカルカッタにおいて下さるよ  
うにとお願いしたのである。

二階の部屋に上がってタクールはお坐りになった。ナンダラルをはじめとするケーシャブの甥おたち、  
ケーシャブのご母堂様、および親戚、知人たちがタクールを丁重にもてなした。二階の部屋でキール  
タンが行われていた。カルトラのセン家の大勢の女性たちが来ている。

タクールのお供をして行ったのは、バブラム、キシヨリーほか、一、二名である。校長も来ていた。  
彼は階下の部屋で、タクールのお歌いになる甘美なキールタンに聴き入っている。

タクルはブラフマ協会の会員たちに向かっておっしゃった——「この世は無常だよ。いつも死シのことを心に留めておかなくてはいけない」そしてお歌いになる——

わがものとは ひとりもなき

仮の世を空しくさすらふ

あわれ 幻マヤの網にかかれる

人びとよ 神の名忘るな

主顔あるじがおに とり仕切るは

二日か、また三日がほどか

時あるじの主、来きたればその場で

消え失せる命と知らで

命かけ 愛せし妻も

その（死ぬ）ときは 汝なれと行くまじ

不吉なるものの如くに

骸むくろより顔をそむけん

タクールはおつしやる——「深く潜るんだよ——上の方でバシャバシャ泳いでいて何になる？  
何日か、何もかも放り出して、心を十六アナ(百パーセント)出してあの御方を呼べ」  
タクールはお歌いになる——

沈め 沈め 沈め

美しき海に わが心よ

深き底にゆきて探せば

聖愛の宝玉 きみを待つなり

探せ 探せ 探せ

さがせ 汝が胸の神のふるさと(プリンターヴァン)

ともせ ともせ ともせ

智慧の灯を 常に明るく

すとん すとん すとん

誰がつくのか 米つき棒は

きけ きけ きけとカビールは言う  
師グルの御足を想い 慕えと

タクールはブラフマ協会の会員たちに、君はわがすべてのすべてを歌うようにとおっしゃった。

君はわがすべてのすべて

命の命 髓の髓

君をおきてこの三界に

わがものと呼びうるはなし

タクールはご自分でお歌いになる——（以下、マー・カーリーとクリシュナは不おなじ異という意味の詩）

ヤシヨーダーにクリシュナは、青ニールマニい玉マニと呼ばれて

やさしく踊ってみせたもの——

あの美しい姿をどこに蔽かして

このカーリーのすさまじきおん顔

すさまじきおん顔——カララヴァアディニー、  
カーリー女神の別名

も一度踊っておくれ、シヤーマよ

剣を捨てて 笛を手に持って

骸骨の首飾りを捨てて 野花の輪をかけ

シヴァのかわりに このバララーマの上で

それ、それ、それ あのときのように

さあ 踊っておくれ シヤーマよ

ヴラジャの野でゴープーたちと

クリシユナとして踊ったように

も一度吹いておくれ 大実母<sup>マ</sup>よ

おまえの魔法の竹笛を

ゴープーたちを夢中にさせた

あの笛の甘い調べを

牛たちを牧場<sup>まきば</sup>からよび集めた

あの笛のやさしい調べを

ヤムナーの流れを逆さに戻した  
あの笛の妙なる調べを

日が暮れてしばらくすると  
養母<sup>は</sup>の心はもう落ち着かず

ゞさあ、さあ かわいい私のゴバーラ  
ミルクに、クリームに、バターをお食べ

巻き毛の髪を養母<sup>は</sup>はとかして

見事に編んでくれたのち

おまえは三ヶ所<sup>からだ</sup>身体を折り曲げ

友のシュリー・ダーマと踊ったね

タティヤ、タティヤ、タ、タ、ティヤ

足飾<sup>あしわ</sup>のひびきが聞こえると

ヴラジャの女は我先にと

一人のこらずとび出て来たね！

体を三ヶ所折り曲げるのがクリシュナ独特の  
ポーズ、トリパンギという  
シュリー・ダーマ——クリシュナの友たち

以前、この曲を聞いたケーシヤブは、新たに作詞したのだった。ブラフマ協会の会員たちは長太鼓とカルタル(小さいシンバル)に合わせてうたった。

すべての人をわが子とし

こよなく愛す大実母

それを思えば両目より

嬉し涙のあふれ落つ

彼等はずづいて、大実母の名をたたえる歌をうたった――

おお、我が奥深き支配者なる大実母よ

昼も夜もなく内に目ざめておられる

そのひざに我を安けく

昼も夜も抱き給うなり

奥深き支配者――アンタルヤーミン

次の歌

心よ 貧しく憐れな乞食のように

なぜ思い惑い さすらい動くか

われらの大実母おんはは大宇宙の主

勝利と完成と豊饒の神なのに

タクールは、今度はハリの名と聖ガウランガの名を讀えて、ブラフマ协会会员たちといっしょに歌い、  
かつ踊られた。

(歌) おお、人よ、幸せに生きることを望むなら

ハリの愛しい御名を愛せよ

(歌) ガウルの愛の大波、わが身にかかりぬ

ガウルの聖き愛の波は

三界のすべてを浸し

一八八四年九月二十八日に全訳あり

(歌) 私はヴラジャに行く、乞食のみなりをして



おお、バーラテイよ、腰布をめぐんでおくれ

(歌) ガウルとニタイ、君たち二人の兄弟は

こよなく慈悲深いお人とときく(おお、主よ)

(歌) ハリの名となえて私のガウルは踊る

一八八四年九月六日に全訳あり

(歌) 行け、マダイよ、ハリポロ、ハリポロと唱え歩くは誰？

私のガウル、それともニタイ？

黄金の足輪を赤い足にはめて

剃った頭に布切れをのせて

まるで、ほんとの気狂いのように見える

ブラフマ協会たちはつづけて歌った――

(歌) 愛に浸されるのはいつ？

(歌) ハリの名呼ぶと涙が落ちる

それはいつの日、いつなれる

一八八四年五月二十五日に全訳あり

タクルルは大きな声でサンキールタンをうたいながら、踊っておられる――

(歌) ハリの名よんで涙を流す

あの二人の兄弟が来たよ！

自分で踊って世界を踊らす

二人の兄弟――ガウランガ(ガウル/聖チャイタニヤ)とニティヤーナンダ(ニタイ)

あの二人の兄弟が来たよ！

自分で泣いて世界を泣かす

あの二人の兄弟が来たよ！

追っても打っても神の愛を話す

あの二人の兄弟が来たよ！

(歌) ゆらゆら、ゆらゆら、<sup>ナディア</sup>河の上

ガウルの愛の波が立つ

チャイタニヤ(ガウランガ)の生誕地である  
ナディアと河(ナディア)をかけている

また、タクールは大実母の名を讃えて――

おお、大実母よ、喜びを盗むなかれ

マーは我が全ての喜びの源なり

ブラフマ協会の会員たちは、あと二つ歌った――

〴〵おお、マーよ 私を狂わせておくれ〴〵

一八八四年十月十九日に全訳あり

〴〵心の大空に 愛の満月ゆたかに昇り――〴〵